都道府県番号	7
都道府県名	福島県

Ⅰ　学校名及び規模　　【　①□　　②◪　　③□　】

学校名	喜多方市立第一小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	４	３	３	３	３	３	２	２１	３８
児童数	９９	８６	１０８	９０	１０７	１００	７	597	

Ⅱ　研究の概要

（１）研究主題

個が生きる授業の創造　～　確かな学力の向上をめざして　～

（２）研究主題設定の趣旨

子どもはそれぞれ能力・適正、興味・関心、性格等が異なっている。また、知識、思考、価値、心情、技能、行動の体系も様々である。子ども一人一人の実態を把握し理解することを基盤として、個の実態に応じた指導方法・指導体制を工夫・改善することにより、基礎・基本を含めた「確かな学力」を育み、子どものよさや可能性を伸ばしていきたいと考えた。

Ⅲ　研究の概要

（１）研究推進体制の工夫

国語科ブロック（１～４年)、算数科低・中学年ブロック、算数科高学年ブロックの３つの研究部により研究実践に取り組んでいる。本年度、高学年において習熟度を考慮した少人数指導を一層推進するために、算数科高学年ブロックを設けた。

（２）研究の実際

①　研究内容（国語科、算数科各研究ブロック共通の視点として次の３点を設定した。）

〈視点１〉基礎的・基本的な内容の明確化と個の実態を生かした指導計画の工夫

- o　基礎的・基本的事項の明確化と評価規準の見直し
- o　子どもの実態に即した教材開発

〈視点２〉個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫

- o　個の実態に応じた学習過程・学習形態（個別指導・グループ指導）の工夫
- o　Ｔ・Ｔ指導や習熟度別指導などの少人数による指導体制の工夫・改善〈算数科〉
  - ・　交換授業（教科担任制）の促進〈実践事項〉

〈視点３〉学習効果を高める評価の工夫

- o　評価方法の工夫・改善(自己評価･相互評価の工夫、指導の過程における評価の工夫)
- o　個々の学習状況をとらえる見取りの充実（座席表、チェックリストの活用）

②　研究実践〈**「個に応じた指導のための指導方法、指導体制の工夫・改善」の観点**から算数科（主に高学年ブロック）における取組を中心に記述した。〉

ア　指導計画の改善

- o　学習指導要領と学習指導要領解説に基づき、指導事項をおさえた。
- o　１単位時間毎の指導の重点を決め、評価の観点を絞り(可能な限り１つ)、評価規準を設定した。さらに、単元を通して４観点をバランスよく評価できるように設定した。
- o　レディネス･事前テスト､前単元までの子どもの見取りを生かし、実態に応じた指導計画に改善した。その際、発展的な学習や補充的な学習の内容を検討して位置付けた。
  - ・　達成状況により、全員発展、全員補充の場合もある。
  - ・　１単位時間の中で行う発展問題も､「発展的な学習」の一部と捉えて教材作成を進めた。

イ　指導体制の工夫

低学年は福島県独自の30人学級、中学年はＴ・Ｔ（教員２名)、高学年は習熟度を考慮した少人数指導（教員５名）の指導体制で指導している。本年度、指導法工夫・改善担当（少人数担当）の加配教員が２名配置されたために、この指導体制が可能となった。

(ｱ) 中・高学年の時間割

中学年は各学級週４～５時間をＴ・Ｔで指導している。高学年は２校時を５年生、３校時を６年生に固定し、水曜日を調整の時間としている。

【加配教員Ａの時間割】

	月	火	水	木	金
1		4-2	4-3	4-2	4-1
2	５年	５年	調整	５年	５年
3	4-2	4-3	4-1	4-1	
4	4-3	4-1	4-2	4-3	4-3囲
5	4-1囲	4-2囲			

【加配教員Ｂの時間割】

	月	火	水	木	金
1	3-1	3-2	3-1	3-1	
2	3-2	3-3	3-3	3-2	3-3囲
3	６年	６年	調整	６年	６年
4	3-3	3-1	3-2	3-3	3-1囲
5		3-2囲			

(ｲ) 高学年ブロックの取り組み

ⅰ　指導教員

５年生→担任３名、加配１名、担任外（研修主任）１名

６年生→担任３名、加配１名、担任外（教務主任）１名

ⅱ　グループ編成

習熟度を考慮したグループ編成を基本としているが、児童の実態や単元の学習内容に応じて２つのタイプを使い分けた。主に、レディネスの差が大きいときには“Ａタイプ”、レディネスの差が少ないときや図形領域では“Ｂタイプ”により指導した。

【Ａタイプ】

単元を通して習熟度を考慮したグループ編成で指導

測　定 ﾚﾃﾞｨﾈｽ・事前ﾃｽﾄ	→	習熟の程度に応じたグループ編成 ＊　児童や保護者の希望を尊重	→	単元を通して習熟度を考慮したグループ編成による指導

（例）６年生「分数のかけ算・わり算」児童数100名

習熟度（高）約30名　（中）約25名×２　（低）約10名×２

【Ｂタイプ】

単元始めは異質集団で指導し、自己診断テストに基づき単元後半を習熟度を考慮したグループ編成で指導

測　定 ﾚﾃﾞｨﾈｽ・事前ﾃｽﾄ	→	単元始め 学力均等少人数	→	自己診断 テスト	→	単元後半、習熟度を考慮したグループ編成　（発展・補充）

（例）５年生「面積の求め方を考えよう」児童数107名

少人数ｸﾞﾙｰﾌﾟ 20名程度×５→　習熟度（高）34名　（中）約20名×３（低）11名

ⅲ　「Ａタイプ」の具体的な進め方

①　学習する内容や子どもの様子により、いくつか（３つ程度）の学習コースを設定する。

②　ガイダンスの実施　各学習コースの内容を子どもに伝える。

［年度当初に児童・保護者に説明した各コースの概要］

ぐんぐんコース～学習した内容を振り返りながら、一つ一つの問題をじっくり解いていく。

すいすいコース～友だちの考えを聞いたり、自分の考えを生かしたりしながら理解を深めていく。

のびのびコース～自分の考えを生かして、いろいろな問題を数多く解いていく。

③　子どもに学習コースを選択させる。（保護者とも相談させる。）

④　子どもの希望を集計し、グループを編成する。

・　希望人数が多い学習コースは、同じコースで複数のグループを編成する。

⑤　グループは固定しない。単元毎にグループ編成をすることを基本とする。

⑥　各グループの進度は同じとする。（単元途中でのグループの変更を認める。）

ウ　指導過程の工夫

本校では、算数科の１単位時間の学習過程のモデルを次のように設定している。

つかむ	考える	たしかめる				まとめる
〈課題把握〉	〈自力解決〉	〈学び合い〉	→	チェックテスト	→	練習 補充・発展問題	〈自己評価〉

習熟度を考慮したグループでの学習では、各段階の指導において、次のことを共通理解して指導にあたった。

「つかむ」段階　→　各コースの実態に応じて既習事項を復習しながら問題を提示する。
各コースの実態に応じて問題の数値を変える。

「考える」段階　→　自力解決の時間を限定して取り組ませ、「たしかめる」段階の時間を確保する。実態に応じてヒントカード等を用意する。

「たしかめる」段階　→　学習内容が理解できたかチェックテスト（確かめ問題）で確認する。
→　基礎的・基本的内容の定着を図る場を設定し、発展問題、補充問題により学習内容を確かなものにする。

エ　学習環境の整備

高学年は、各学年隣接の余裕教室（他学年にはない）とオープンスペースを活用した。オープンスペースは、多目的に使用するため、移動しやすい長机と椅子、移動黒板を常備した。

（３）研究の成果と課題〈主に算数科高学年ブロックについて記述した。〉

①　成果

○　指導計画を作成する際に、１単位時間毎の評価の観点を１～２つに絞って評価規準を設定したことにより、指導の重点化を図ることができた。

○　５名の指導者を配置したことにより､グループによっては１０名程度の少人数指導が可能となり、きめ細かな指導をすることができた。また、習熟度の高いグループでは、発展的な問題に意欲的に取り組む姿が見られた。意識調査においても算数を「好き」「どちらかといえば好き」と答えた割合が約７０％となり、年度当初に比べて約１０％増となった。特に習熟度低・高のグループにおいて伸びが顕著に見られた。

○　担任以外の教員が指導する場合、子どもの実態把握に時間がかかる面があったが、年間を通して指導してきたことにより、当初の問題点は解消されつつある。また、コース間での情報交換や発展問題や補充問題を共有化することにより、協働体制が強化され、指導法の改善にもつながった。

○　１時間毎にチェックテストを行い、一人一人の学習状況を把握し、その結果に基づき発展問題や補充問題に取り組ませた。理解が不十分だった子どもには個別、または小グループでの再指導をすることにより、学習内容の定着を図ることができた。１月末に実施した学力検査（ＮＲＴ）で、高学年は５年生の数量関係を除き、各領域とも全国正答率を上回った。

②　課題

○　机間指導の際、個別にアドバイスをしたり、賞賛したりするなど、一人一人の子どもと関わる回数をさらに多くして、指導と評価の一体化を図りたい。そのために、指導者が日々の見取りを生かして教材研究を深め、短時間で的確に指導できるようにしたい。

○　発展的・補充的な学習については、子ども一人一人の学習状況に応じて、より効果的な指導ができるように、内容（質・量）や学習場面の吟味・検討を深めることが必要である。

○　学力検査の結果を分析し、指導方法を見直し、改善していく必要がある。

（４）研究成果の普及の方策

o　平成１５年度公開研究発表会　平成１５年１１月１１日（火）

o　平成１６年度公開研究発表会　平成１６年１１月１６日（火）＜予定＞

o　研究集録を作成し、会津教育事務所域内の各小中学校に配布した。（教育事務所経由）

o　域内の基礎学力向上推進研究協議会（各校１名参加）において、実践報告を行った。

◇　次の項目ごとに該当する個所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級
□１３～１８学級　☑１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ・Ｔによる指導
☑一部教科担任制　□その他

【研究教科】　☑国語　□社会　☑算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無

【特色ある取組事例としての紹介したいポイント】
○　タイプ別グループ編成の工夫と指導過程の工夫
○　単位時間ごとのチェックテストによる実態把握と事後指導の工夫